

<研究ノート>学生は日本語ボランティアを通じて何を学ぶのか：多文化共生に貢献する人材の育成に向けて

竹山, 直子 / 長谷川, 由香 / 村田, 晶子

(出版者 / Publisher)

法政大学教育開発支援機構FD推進センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Hosei Educational Research and Practice / 法政大学教育研究

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

32

(発行年 / Year)

2019-08-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00023293>

学生は日本語ボランティアを通じて何を学ぶのか —多文化共生に貢献する人材の育成に向けて—

What Do Students Learn through Japanese Language Volunteering? : Fostering Multicultural Minds

村田 晶子 (法政大学グローバル教育センター教授)
竹山 直子 (法政大学グローバル教育センター教育講師)
長谷川由香 (法政大学グローバル教育センター教育講師)

キーワード

日本語ボランティア、日本語教育、多文化共生、人材育成

要旨

本学の日本語教育プログラム (JLP) では、毎学期60名を超える学部生が日本語ボランティアとして留学生との交流活動に参加している。本稿は日本語ボランティアのアンケート結果を分析し、学生たちの多様な学びを明らかにする。そして、こうしたボランティアの体験が本学の人材育成の一環としてどのような意義があるのかを明らかにするとともに、キャリアの一つとしての「日本語教育」の可能性についても言及する。

1. はじめに

大学の国際化の流れの中で、大学で学ぶ留学生の数が増加しており、キャンパス内で留学生を見かけたり、外国語の会話を聞くことも珍しいことではなくなった。しかし、新しく大学や大学院に入学する留学生の多くは、日本でのネットワークをもっておらず、言語の壁などから親しい友人を見つけにくいこともあり、学内で疎外感を感じる学生が少なくない (横田1991、藤井・門倉2004、中野2006、加賀美・小松2013)。こうしたことを踏まえて多くの大学では、多様な学生間の交流を促進するために国際交流ラウンジを設置したり、多言語の交流会を設けるなど (英語カフェ、ドイツ語カフェなど)、学生達の交流の機会を増やす努力をしている。本学の日本語教育プログラムにおいても、留学生に国際交流の機会を提供するために毎学期日本語ボランティアを募集しており、60名以

上の学生ボランティアが日本語学習支援や交流活動に参加している。

日本語教室における日本語ボランティアのクラスへの参加は、留学生にとっては日本語の運用練習の場として、そして、同じ年代の学生同士の交流の場として大変貴重な機会であり、毎学期留学生には好評を博している。日本語教育研究者による、日本語ボランティアが参加する授業や交流セッションに関する研究においても、留学生がボランティアの参加を楽しみにしており (村岡1992)、ボランティアとの交流や協働学習が日本語学習に役立っていること (寅丸2007、横倉2006、矢部2005)、社会文化の理解につながること (横須賀2003)、留学生の学習意欲を高めること (赤木2013) など、言語や文化学習の効果が指摘されている。

しかし、こうした日本語教育の視点からの「留学生の学び」の研究が数多くなされる一方で、日本語ボランティアを中心に据え、彼らの

学びを分析した研究は十分には行われていない。例えば、日本語ボランティアの参加動機を分析した杉原（2012）では、ボランティア学生の気付きは大きく二つに分けられるとして、1) 国際交流への関心（約6割）、2) 日本、日本語教育への関心（約3割）が挙げられているが、ボランティアが実際にボランティア活動をした後でどのような気付きがあったのかに関しては分析がなされていない。また、ファン（2005）、永井（2012）では、ボランティア学生の活動参加を通じた気付きとして、1) 留学生の日本語力への驚き、2) 語学の勉強方法に関する気付き、3) 視野の広がり、4) 日本の再発見、5) 今後の国際交流への積極的な参加への動機づけなどが挙げられているものの、調査の規模が小さく（実施クラス数がそれぞれ5クラス、3クラス）、ボランティアの背景、参加動機、交流のトピックなどの情報を含んだ体系的な調査がなされていない。こうしたことからより多角的な視点から日本語ボランティアの学びや気付きを分析することが求められている。

さらに本学の人材育成の観点から見ても、日本語ボランティアを通じた学びがどのようなものであるのかという点を明らかにすることは重要であろう。本学の「グローバルミッション」として、日本の学生の海外留学の促進（「世界のどこでも生き抜く力をもったグローバル人材

の育成」と「留学生の受け入れ」の拡大を通じたキャンパスのグローバル化が目指されているが、日本語ボランティアはこうした二つのベクトルの接点としてどのような意義があるのだろうか。こうした点を検討することは本学のグローバル化に対応した人材とは何かを考える上でも重要であると考えられる。

本稿ではこうした課題意識に立ち、日本語ボランティアとして参加する学生たちは、どのような背景を持ち、日本語ボランティアを通じて何を学ぶのか、そしてそれは彼らの今後の目標設定とどのようなかかわりがあるのか、2018年度春学期に日本語科目に参加したボランティアの学期末アンケートの分析を行う。

本稿は村田が全体を執筆し、竹山、長谷川はボランティアの受け入れ教員としてボランティアに対するアンケートの質問項目の作成に関わり、本稿の結論部分に加筆した。

2. JLPによる日本語ボランティアの募集

本学の日本語教育プログラム（JLP）では毎学期日本語ボランティアの協力を得て授業を行っており、2018年度春学期には以下の17の日本語科目で日本語ボランティアを募集した。ボランティアの内容は教員が指定している。

表1. ボランティアを募集した科目とボランティアの内容

番号	科目名	ボランティア内容
1	J1S日本語総合Ⅱ	・ペアまたはグループでの会話練習におけるパートナー ・表記練習におけるサポート
2	J1S日本語総合Ⅲ	・ペアまたはグループでの会話練習におけるパートナー ・表記練習におけるサポート
3	J2S日本語総合Ⅰ	・ペアまたはグループでの会話練習におけるパートナー ・表記練習におけるサポート
4	J2S日本語総合Ⅲ	・ペアまたはグループでの会話練習におけるパートナー ・表記練習におけるサポート
5	J3S日本語総合Ⅱ	・ペアまたはグループでの会話練習におけるパートナー ・表記練習におけるサポート
6	J3S日本語会話	会話、ロールプレイの練習相手、ディスカッション参加等

7	J4S日本語会話	会話、ロールプレイの練習相手、ディスカッション参加等
8	J5S日本語集中Ⅲ	会話、ロールプレイの練習相手、ディスカッション参加等
9	J5S日本語会話	・シャドーイングにおけるアクセント/イントネーションのチェック ・会話ロールプレイにおける相手役 ・クラス全体での会話におけるファシリテーター役
10	J6S日本語集中Ⅲ	会話、ロールプレイの練習相手等
11	J6S日本語集中Ⅲ	会話、ロールプレイの練習相手等
12	J6S日本語読解文法Ⅰ	練習中のアドバイスとディスカッションへの参加
13	ビジネス日本語1 S	会話の練習相手。日本語についてのご意見番 (若い世代がどんな風に使っているかなどざっくばらんに話してもらいます)。
14	ビジネス日本語2 S	サービスの場面や面接に参加するなど、社会参加場面での言葉の使い方を一緒に考えてもらいます。
15	日本社会とメディア	留学生とのディスカッション、日本事情の情報提供
16	日本社会と文化	留学生とのディスカッション、日本事情の情報提供
17	フィールドワーク・課題研究Ⅰ	留学生のフィールドワークの支援

募集に際してはこのようなクラス情報と共に、ボランティア参加の心構えとして次(表2)の情報もグローバル教育センターのホームページに掲示している。学生の多くは留学生との交流には英語が必要だと考えていることから、日本語ボランティアには英語力が必要ではなく、国際交流として関わる上で参加しやすいことを述

べている。また、学生の中には英語での交流を希望して参加する学生もいるため、留学生を英語の練習台として考えてはならないことも強調している。さらに、コースの途中で来なくなったり、遅刻、欠席が多いと留学生とのペアワークに支障が出るため、欠席、遅刻に関する注意事項も掲載している。

表2. ボランティアの心構え

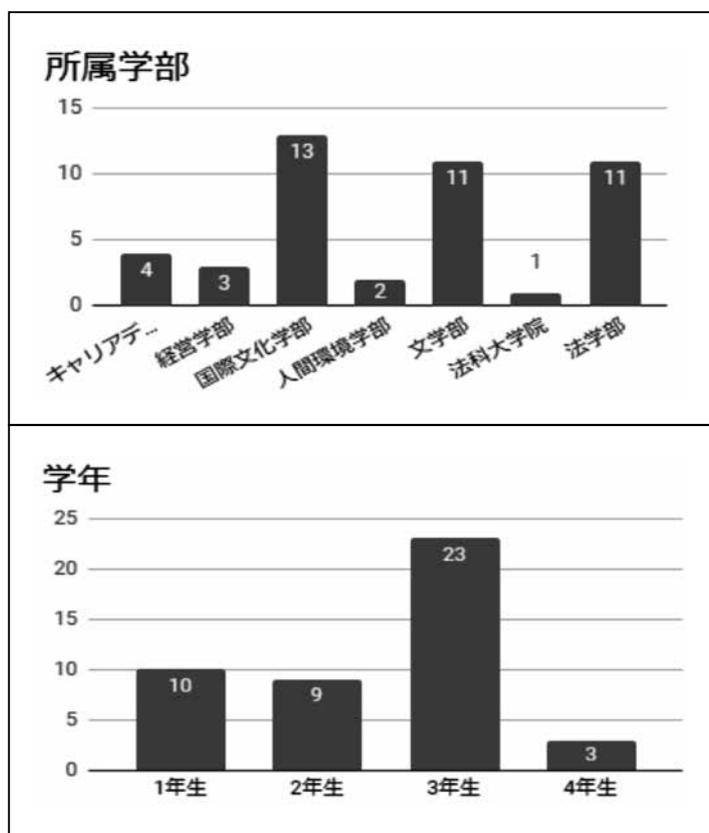
<p>1) 国際交流の最初の一步として参加しやすい内容であること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・このボランティアは法政大学で日本語を学ぶ外国人留学生に対し、【日本語で】授業の補助を行うもので、英語のレベルは問わない。授業中に英語で会話をするのではないので英語に自信がなくとも参加できる。 ・日本語科目の講師のサポートをするボランティアであり、国際交流ボランティアとして経験のない学生も参加しやすい内容。 <p>2) 欠席しない心構えで臨むこと</p> <p>日本語科目ではボランティアと留学生とのペア、あるいは小グループで言語運用練習を行う。ボランティアが休むと授業の進行に支障が出る。また、留学生もがっかりするので登録した授業には必ず出ること。万が一来られない場合は、出来る限り授業の前日(夜20時)までに連絡すること。連絡なく休むことは絶対にしないこと。</p> <p>3) 教室では日本語を使うこと</p> <p>留学生は日本語を勉強しにクラスに来ているため、留学生を英語の練習台として考えないこと。教室では以下のようにすること。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教室では原則日本語で話す。 2. 留学生が日本語が分からない場合は、まず日本語で簡単な表現に言い換える。 3. それでも通じない場合のみ、媒介語を使う(但しその場合も媒介語は最小限にする)。

3. ボランティアのアンケート結果

以下、2018年度春学期の日本語教育プログラムにボランティアとして参加した学生に学期末に行ったアンケートの結果を分析する。ボランティアとして参加した学生は64名で、アンケートに回答した学生数は45人であった（回答率70%）。アンケートの質問項目は次のとおりである。

- ① 学生の属性
- ② JLP日本語ボランティアの参加回数
- ③ 海外渡航経験と滞在期間
- ④ ボランティア参加の理由
- ⑤ 日本語教室での交流で話したトピック
- ⑥ 教室外での支援について
- ⑦ 教室外での交流について
- ⑧ ボランティアを通じた気付きや学び
- ⑨ ボランティア経験を今後の活動に生かせるか

①アンケートに回答した学生の属性



所属学部は国際文化学部が最も多く（13人：28.8%）、次いで文学部、法学部（11人：24.4%）となっている。国際文化学部が多い理由は、基本的に全員の学生が海外留学することから、留学前、留学後の交流の機会を求めている学生が多いのではないかと考えられる。

学年は3年生が多い（23人：51.1%）。履修科目数が減り、時間的に余裕があり、就職活動が始まっていない学生が日本語ボランティアに参加する傾向にあることがわかる。

図1. アンケートに参加した学生の属性

②ボランティア参加回数

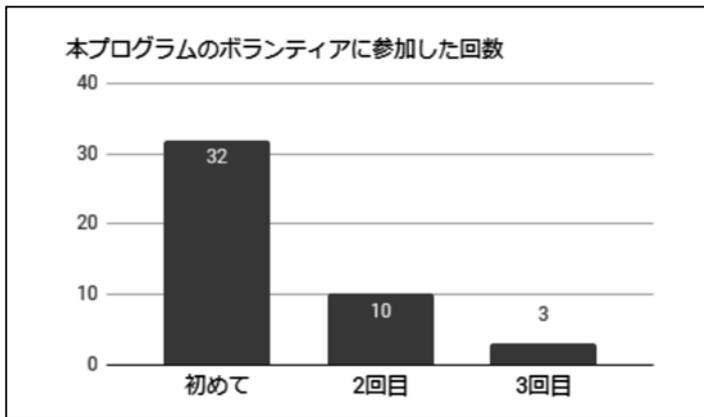


図2. 本プログラムのボランティアに参加した回数

JLP日本語ボランティアへの参加回数については、ボランティアに初めて参加する学生が多いことがわかる（32人：71.1%）。日本語での国際交流は英語での交流に比べて気軽に参加することができることから国際交流の「はじめの一步」として参加する学生も少なくないのではないかと考える。

③海外渡航経験と滞在期間

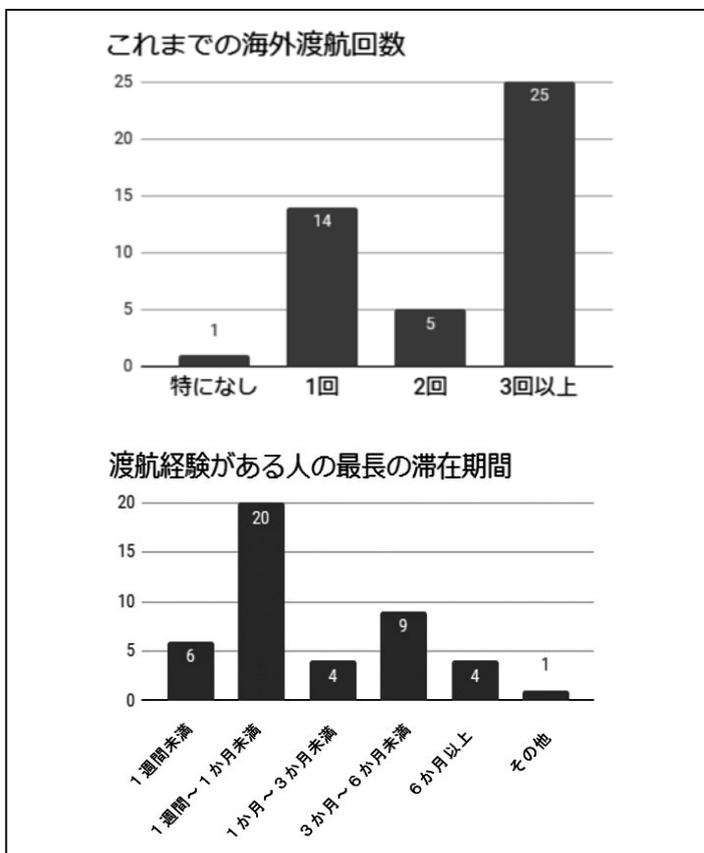


図3. 海外渡航経験と滞在期間

ほとんどの学生が渡航経験があり、3回以上の海外経験のある学生が全体の半数を超えている。この結果から日本語ボランティアに参加する学生の多くが海外に興味があり、異文化環境に身を置いた経験があることがわかる。

学生の海外渡航期間をみると、短期（1か月以内）の学生が20人（57.7%）で最多となっている。このことから多くの学生が海外旅行、あるいは短期の語学研修をきっかけとして、国際交流や日本語ボランティアに興味を持ち応募しているのではないかと考えられる。

④ボランティア参加の理由

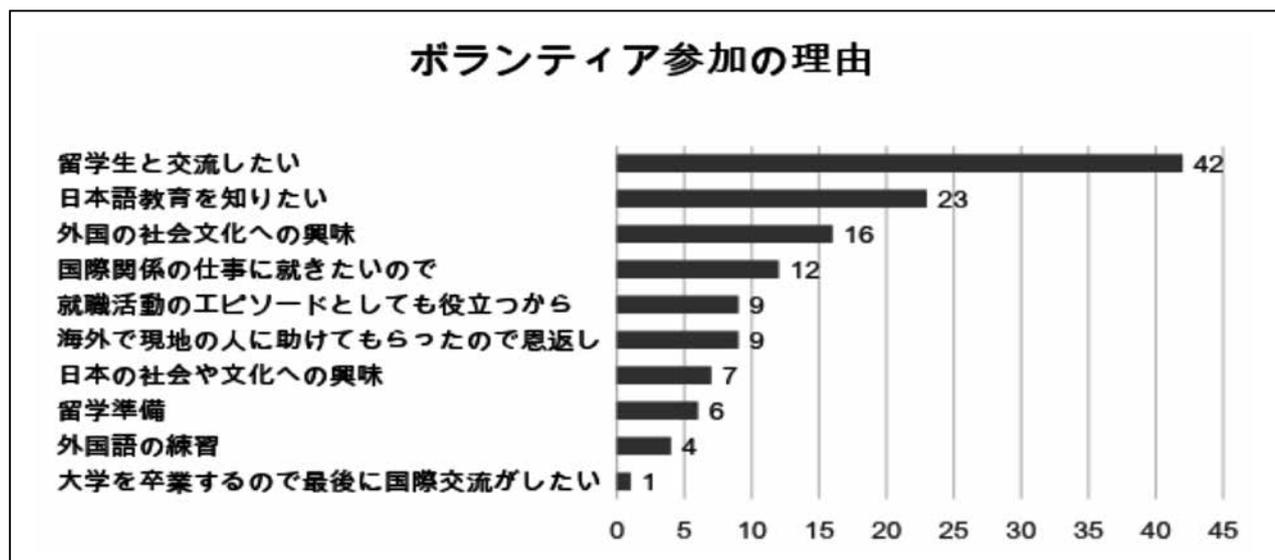


図4. ボランティア参加の理由

ボランティア参加の理由としては、留学生との交流に関心があるという回答が最も多く（93%）、次いで日本語教育への興味となっている（51.1%）。この2つの項目は、杉原の調査で明らかになった動機（留学生交流への関心、日本／日本語を教えることへの関心）とも共通している。しかし、杉原の調査ではボランティア申し込み時の参加理由を調べたのに対し、本稿

のアンケートは参加前（学期最初）ではなく、ボランティア参加後（学期末）に学生に参加理由を尋ねているため、実際に日本語教室に参加して日本語教育に興味を持ったことも、参加理由における「日本語教育への興味」として反映されているのではないかと考えられる。次回の調査では参加前にもアンケート調査を行い、再度検証したい。

⑤ボランティアとして教室での交流で話したトピック

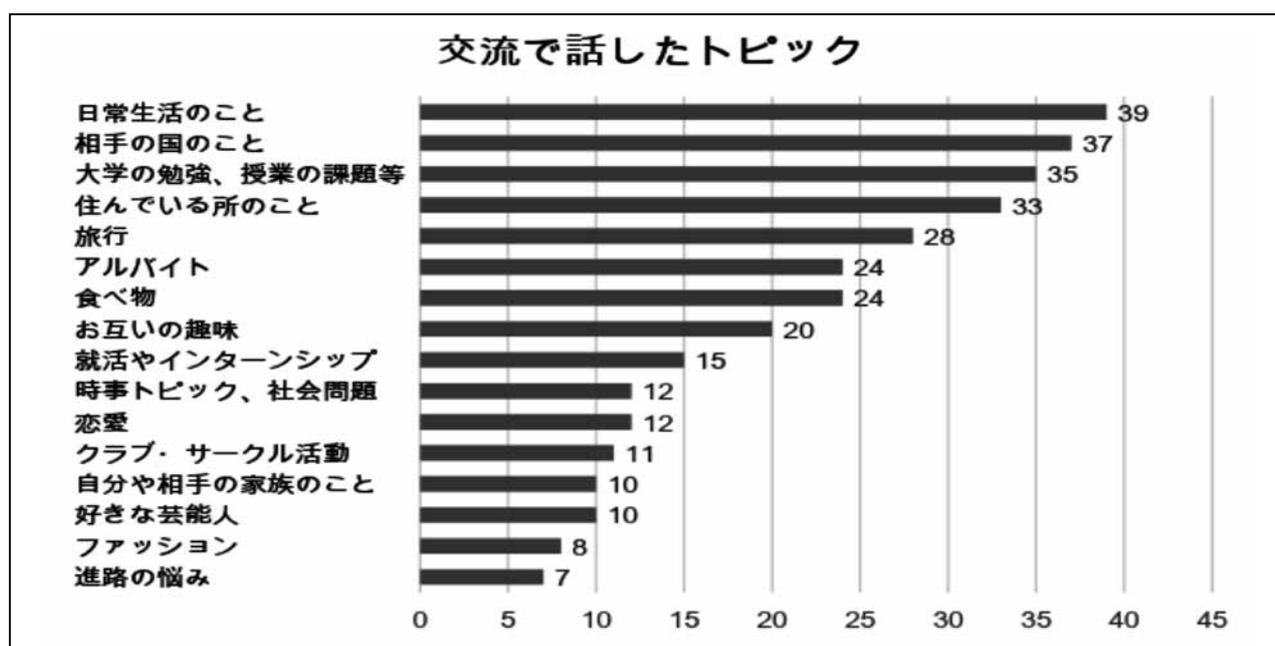


図5. 交流で話したトピック

ボランティアとして教室での交流で話したトピックとしては、日常生活のこと（86.6%）、相手（留学生）の国のこと（82.2%）、大学の勉強（77.5%）、住んでいる所のこと（73.3%）、旅行（62.2%）などさまざまなものが挙げられている。これは授業のトピックとして取り上げられ

たもの、ディスカッションの中で出てきたトピック、休憩時間に話した内容などさまざまなものが含まれていると考えられる。この結果から、全体としてはボランティアと留学生が身近な日常のことや留学生の国のことを中心に話していることがわかる。

⑥教室外での交流

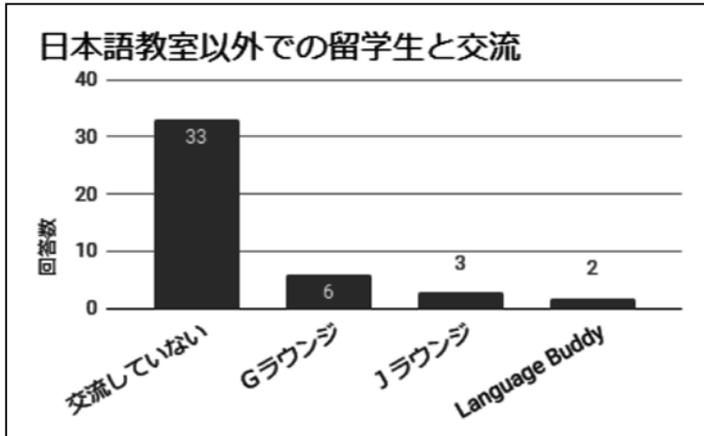


図6. 日本語教室以外での留学生との交流

交流は教室活動を中心としており、教室外での交流はあまり行われていないことがわかる。この結果から考えて、教室での交流が自然に教室外での交流に発展するかというところではないことがわかる。こうした点を踏まえて、留学生が日本の学生と話す場として、日本語教室がボランティア学生と交流する場を継続して提供することが大切であろう。

⑦教室外での支援

ボランティアは留学生からさまざまな相談を受けており、次のリストに示したようにおいしい店、銀行口座の作り方、携帯端末の手続きなど多様な情報を提供したり、留学生の調査に協力したりしている。

- ・おいしい店を教える
- ・銀行口座の作り方を教える
- ・パソコンの使い方
- ・SIMカード解約
- ・床屋の予約の仕方
- ・式典やイベントの服装
- ・入試センターの場所、Jラウンジについて
- ・アルバイト探しの話し方
- ・ラインで日本語添削インタビュー協力

⑧ボランティアを通じた気付きや学び

ボランティアを通じた気付き、学びは、次の表3に示した通りで、「日本語の難しさ、面白さ」(16)、「留学生の学習へのポジティブな驚き」(7)、「留学生の日本語学習を見て、自分

も刺激を受けた」(7)、「自分の視野の狭さ、知識の少なさに気づいた」(6)、「多様性への気付き」(6)、そして「積極的なコミュニケーションの重要性への気付き」(2)などのコメントが挙げられた。詳細は以下の通り。

表3. ボランティアを通じた気付きと学び (回答例)

	項目	回答例
1	日本語の難しさ、面白さ (16)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を勉強し始めたばかりの留学生が多く、私たちが普段当たり前に使っていた日本語をどうしてそのように言うのかと聞かれることがあり、日本語の活用や、状況に応じて変わる使い方は改めて難しいと思いましたし、言葉の面白さを感じました。(例えば、いいの過去形はいかったではなく、よかったになるなど。) ・今まで当たり前に使っていた日本語が実はとても難しいということを実感できました。日本語に対して、私自身も理解を深められました!
2	留学生の学習へのポジティブな驚き (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を1から(ひらがなから)教えることから始まり、(学期末の)今では普通に日常会話ができるようになっていたのには驚いた。 ・日本人は外国語を話すことに抵抗があるけれど、留学生は日本語を話そうとする姿勢がすごくあること。
3	留学生の日本語学習を見て、自分も刺激を受けた (7)	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強に対する意欲と熱意に感銘を受けました。理解できないことを何回も聞いて、徹底的に理解する方が多いと感じ、自分は彼らのこういう所を見習いたいと思います。 ・ボランティアで新しい友達ができるたびに、自分が勉強不足であることを多々感じます。教育環境や国からの圧力の違いもありますが、勉強への熱意や意識が違い、もっと自分も頑張らなくてはと留学生たちは思わせてくれます。 ・多くの留学生にとって日本語は第三言語であるにも関わらず、その日本語で多くのリサーチをし、発表していて本当にすごいなと思った。自分は第二言語にすら苦戦しているため。
4	自分の視野の狭さ、知識の少なさに気づいた(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と交流することで、物事を考える際に、自分の視野の狭さを感じもっと色々な角度から物事を見る必要性を実感しました。 ・自分が他国の文化のことは勿論、自国の社会の特徴についても知らない部分が多いことに気付き、またそれらを多く理解しているほど留学生との会話が盛り上がることを知った。
5	多様性への気付き (6)	<ul style="list-style-type: none"> ・テレビでやっていた情報は全ての外国人にあてはまるわけではない。あまり国籍ではなく、そのひと個人として人を見るのが大切だと感じた。 ・日本人と授業を受けるスタンスが違う。遅刻や欠席、話を聞くタイミングも自分のペースで進めようとする留学生が多い。そのペースを大事にした方が良かった。 ・ロールプレイを通して日本人とは他者に対する対応が全く違うことに驚きました。例えば、隣人がパーティーをしようとしているから注意してみよう、という例題では、騒いでいる隣人が注意しに来た人をパーティーに誘ってしまったら、誘われた方も怒っているはずなのにパーティーに参加しようとしていました。日本人には自分に対して注意しに来た人を逆に巻き込むことは考えられないためとても驚きました。
6	積極的なコミュニケーションの重要性への気付き (2)	<p>言葉がわからなくても、伝えようと思うことが大切なのだと感じた。私は、英語を話そうとする時、自分の英語の拙さを相手に笑われるのではないかと感じていたが、よく考えてみれば、私はボランティアをやる中で、一生懸命日本語を話そうとする留学生を笑おうとは1mmも思ったことはありませんでした。このことから、私は「誰も私のことを笑おうとは思っていない」と気づき、「英語を話すと笑われるのではないか」という不安が少なくなり、英語を話すことへの抵抗が減りました。</p>
7	学び合いの喜び (1)	<p>自分はボランティアセンターの学生スタッフで日々ボランティアに貢献しており、互いに学び合いたいという想いを強く持っています。今回のボランティアでは日本語を教えると共に、相手からも自国について素敵な事や美味しい物、自分の家族など様々な内容について教えてくれました。それは文化の学習にも結びつき、日本との生活環境や言語、人との関わり方の違い、多くの事を学ぶ事が出来ました。正直英語や他の言語が得意でない人がいくら国際交流といっても相手の言いたい事が全て聞ける訳ではありません。片言の日本語であったとしても(留学生が)日本語が少しでも会話に入ることで我々の理解にも繋がります。やはり言葉が通じるって良いですね。</p>

() 内は筆者が追記した。

⑨ボランティア経験を今後の活動に生かせる点
ボランティア経験を今後に生かせるかどうか、そして生かせるとしたらどのような点かという問いに対するコメントは次の表のとおりで

あり、「仕事・将来のキャリア」(7)、「外国語コミュニケーション」(4)、「今後の多文化交流」(4)、「留学」(4)、「日常生活」(4)、「学業」(4)などが挙げられた。

表4. ボランティアは今後の活動に生かせるか (回答例)

	活動	学生のコメント
1	仕事・将来のキャリア (7)	<p>〈日本語教育・外国人サポート業務への関心〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来日本語教師になりたい。 ・日本語教員になることができれば、ボランティア活動を通して感じた、自分に対する問題点や課題を解決して、わかりやすい授業を行うことができる。 ・この経験から在日・訪日外国人のサポートに強く関心を持つようになった。 <p>〈就職活動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・就職活動でもこの経験を通して自分の興味の分野が広がった。 ・留学生がとても明るく、母国から離れて頑張っている姿を見て自分も来年からの就活を頑張ろうと思えた。 ・就職活動で留学生と討論しあった日本側からと海外側からの視点の意見を盛り込むことができている。 <p>〈アルバイト〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この経験は、アルバイト先の海外のスタッフとの接客、お客さんの接客に生かせると思う。
2	外国語コミュニケーション (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・今回は日本語を使っただけの交流だったが、外国語でも円滑にコミュニケーションを取る為の役に立つと思う。 ・留学生が一生懸命日本語を話している姿をみてとても嬉しかった。私の英語がたどたどしくても外国人の人は嬉しいと感じると思うので積極的に話そうという気持ちが芽生える良いきっかけとなった。 ・留学生の友達が増えたので外国語学習の意欲が高まった。 ・(外国語を話すとき) 話し方、ジェスチャー、文法に気をつけようと思った。
3	今後の多文化交流 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・このボランティアを通してできたかけがえのない友達とこれからも交流を続けていきたい。 ・今後も留学生との交流イベントに参加しやすくなった。 ・外国の人と関わる時に話す内容など活かせると思いました。 ・留学生と出かける約束をして日常生活の中で楽しみを増やすことができる。
4	留学 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生と関わることにより自分自身が留学をする決心がついた。 ・留学生が自国と日本に関して知識をたくさん持っていたように自分もそのように準備して留学に臨めるとより良いものになると感じた。 ・留学するときの課題、困難さを理解し、心構えができた ・現地の人とのコミュニケーションのあり方を学んだ
5	日常生活 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・人に分かりやすく話したり、説明する能力 ・人見知りをしなくて人間関係を作ること ・人に気軽に声をかけられるようになったこと ・まず何かやってみる勇気もてたこと
6	学業・知的活動 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強への意識が変わり様々な面で自分を変えてくれた。 ・ゼミの研究(多文化共生)とつながっている。 ・国際文化学部の学生として異文化交流をできたので、学業にとっても活かせる良い経験。

4. 教員が感じる日本語ボランティアの成長

日本語教員にとって日本語ボランティアは留学生の日本語練習のパートナーという意味合

いが強い(留学生科目の担当教員として、日本語や日本事情の学習、交流の機会を提供することに力を注いでいるため、日本語ボランティアの学生の気付きや学びを強く意識した活動をし

ているわけではない)。

しかし、ボランティアを受け入れていたクラスの教員7名のアンケートでは、教室での日本語ボランティアの成長として以下のようなさまざまな点が挙げられている。これらの項目は

ボランティア達が挙げた学びや気付き、将来に生かせる点と重なっており、ボランティア学生の学びや気付き、成長を裏付けるデータとなっている。

表5. 教員が感じるボランティアの成長

	項目	教員のコメント
1	社会性、積極性の高まり	<ul style="list-style-type: none"> ・お客さん気分で座っていたボランティア初参加の学生が、学期の終わりには積極的にサポートに回るようになった。緊張の面持ちで現れた学部1年生が、留学生とともに法政の一員として生き生きと活躍するようになる姿を見た。 ・最初は（特に学部1年生）不安なくらい消極的だった学生が回を重ねるごとに積極性を増し、自分から動き留学生と活動、交流していく過程は毎回目撃している。相互作用があるんだと改めて感じた。 ・留学生の意見や彼らの勉強に対する姿勢、日本への興味や知識に刺激を受けたのではないか。
2	自国（語）を知り、視野を広げるのに効果があったのではないか	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生から思いもよらぬ質問（日本語や日本文化など）をされ、自分なりに考え、答えている姿も見られた。 ・敬語の体系や、日本語を客観視する力、学習者の学び方を知るなど。日本語についても新たな発見があり、日本語の教科書を買って勉強したいという学生もいた。
3	異文化理解・国際交流の楽しさを経験した	異文化を学んだことがプラスになったとのコメントが学生からあった。外国人と親しく話す機会を持ち、またいろいろな考えや意見の交換ができて楽しかったようだ。
4	将来の方向性への影響	ボランティアさんからも、ボランティアに参加したことで留学を目指すようになった、価値観が変わった、教職に自信がついたという声も聞いた。
5	コミュニケーション力の向上	（ボランティアは）おとなしい留学生をどうやって会話に巻き込むかを意識したので、（ボランティア自身も）そういうコミュニケーション能力が向上したと思う。

5. 留学生の感想

留学生から学期末の最終クラスでのボランティアへの感謝のメッセージとして以下のコメントが出された。感謝のコメントとしては、ボランティアの優しさがうれしかったこと、日本

語や日本事情学習として役立ったこと、勉強以外の支援や交流がうれしかったこと、同世代の若者と交流ができてよかったことなどが挙げられており、日本語ボランティアが積極的に留学生と関わっていたことがうかがえる。

表6. ボランティアへの感謝のコメント

	テーマ	留学生の日本語ボランティアに対する感謝のコメント
1	優しく接してくれた	<ul style="list-style-type: none"> ・親切に接してくれてうれしかった。 ・熱心に自分の話を聞いてくれた。 ・安心して日本語が話せる環境を作ってくれた。
2	日本語、日本事情の学び	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語を話す練習ができてよかった。 ・日本の若者の考え方が聞けた。 ・日本人といっても大学生の考え方、地域差など多様であることがわかった。 ・ボランティアのことだけでなく、親世代の考え方について話してくれたので世代による違いが分かった。 ・交流を通じて日本語のバリエーションを知ることができた。 (若者のよく使う言葉、男言葉、悪い言葉、大学生も敬語ができないことなど)
3	勉強以外の支援、交流がうれしかった	<ul style="list-style-type: none"> ・店、おすすめの場所などの情報を教えてくれた。 ・アルバイトの探し方のアドバイスをもらった。 ・調査に協力してくれた。 ・履歴書を添削したり、面接の練習を一緒にしてくれた。 ・一緒に遊びに行ったりして友達になれた
4	同世代の若者としての意見交換ができた	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ大学生として共通する悩みを話し合えた。(進学、仕事、結婚など) ・同じぐらいの年齢のみなさんに、就職活動、インターンについての体験談を聞いて、自分のことも話せてうれしかった。

6. 考察：先行研究との比較

本稿は、学生たちが日本語ボランティアを通じた気付きや学び、そしてボランティア経験を今後の学生生活やキャリアにどのように生かせるのかという点を学生アンケート結果を中心に分析した。以下、先行研究と比較する中で本稿で得られた知見を4点あげたい。

第一に、ボランティア参加により日本語および日本語教育への関心の高まりが見られた。杉原(2012)は、前述したようにボランティア申し込み時の参加理由を分析し、1) 国際交流への関心、2) 日本、日本語教育への関心の2つを挙げており、これは本稿でも共通している。ただし、本稿の調査では、参加申し込み時ではなく、参加後に調査したものであるため、実際に日本語教室に参加して日本語教育に興味を持ったことも関係しているためか、「日本語教育への興味」が全体の5割を占め、より高い割合の学生が日本語教育に興味を持っていることがわかる。

第二に、杉原はボランティア参加の動機が「日本語を教えたい」というものである場合は、マジョリティーのマイノリティーに対する規範

の押し付けにもつながるので注意が必要である、と述べている。しかし、本学の学生のコメントには規範的なコメントは見られず、むしろ自分が日本語を知らないということに対する反省を述べる学生がほとんどであった。こうしたことから本稿の調査結果では、日本語ボランティアが日本語教育への興味を喚起するものであるとともに、学生が自明としていた日本語を問い直す機会となっていることがわかる。

第三に、ボランティア学生たちの背景や学びについてより多面的に分析したことも本稿の特色としてあげられる。ファン(2005)、永井(2012)らは、ボランティアの参加を通じた学びとして、1) 留学生の日本語力への驚き、2) 語学の勉強方法に関する気付き、3) 視野の広がり、4) 日本の再発見、5) 今後の国際交流への積極的な参加への動機づけなどを挙げており、本稿のアンケート結果でもこれらの項目は共通している。しかし、本稿ではこうしたカテゴリーだけでなく、本学のボランティア参加者の背景も含めた調査を行い、ボランティアの多くが、短期の旅行や語学研修の経験があるものの、国内の国際交流活動の体験が少なく、大学での

ボランティアが国際交流の「はじめの一步」という意味合いが強いこと、そして、そうした参加者が、ボランティア体験を通じてさまざまなことに気づき、学んだことをカテゴリーだけでなく、各カテゴリーの中の様々なコメントで示した。これによって、本稿はボランティアの学びの背景と内容をより多面的に分析することができたのではないかと考える。また、学生の学びとして、日本語自体への気付きや興味に関するコメントが多い点でも先行研究の結果とは異

なるといえるだろう。

第四に、本稿の知見として最も重要な点は、ボランティア経験を今後どのように生かせるのかという点に関して、学生たちがどのように考えるのかを明らかにしたことである。アンケートの回答に仕事や将来のキャリア、外国語コミュニケーション、今後の多文化交流、日常生活、学業、留学など多様な可能性が挙げられたことが、これまでの研究では指摘されていない新しい点である（図7参照）。

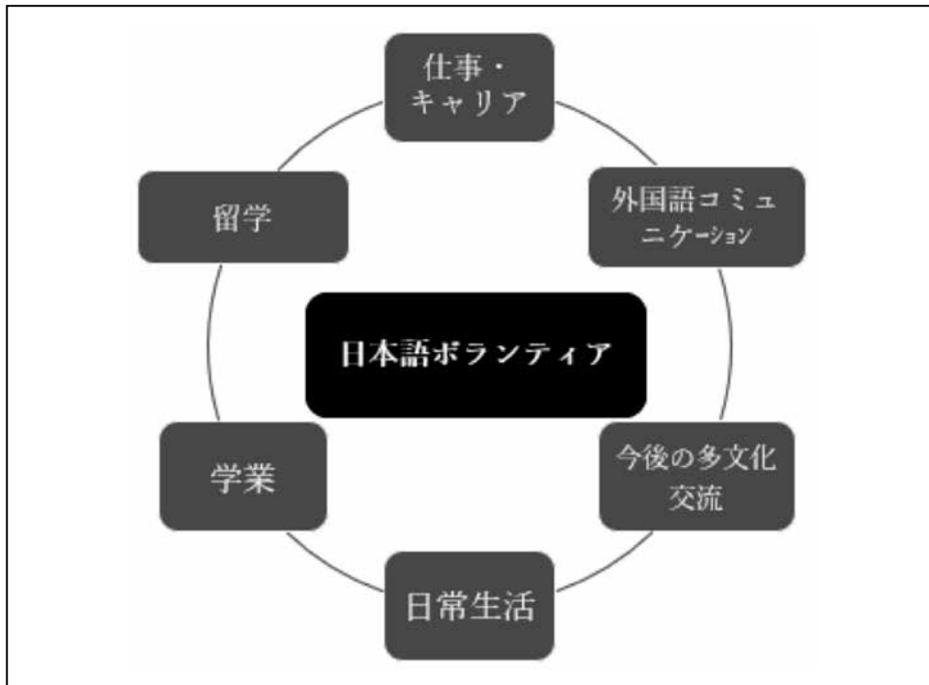


図7. 日本語ボランティアがどのように今後に生かせるのか
(学生のアンケート結果まとめ)

図7の「仕事・キャリア」を例にとってみると、ボランティア経験が生かせると答えた学生の中には、日本語教師に興味がある学生だけでなく、広く在日・訪日外国人サポート業務に関心を持ち始めた学生、留学生と討論した経験が就職活動にも役立つと考える学生、アルバイト先での外国人スタッフや客とのコミュニケーションに生かせると考える学生など、ボランティア経験の将来に向けたさまざまな可能性が挙げられている。また、学生たちの挙げたコメントからは、外国語コミュニケーション、学業、日常生活における多様な他者との積極的な交流

など、さまざまな面でボランティア経験を生かすことができることがわかる。こうしたことから、ボランティア経験が学生が今後主体的に学び、行動していくうえでの刺激になっていることがうかがえる。

7. 今後の展望

このような学生の学び、そしてボランティア経験を今後活かしたいと述べている学生達のコメントは、本学の人材育成の観点からみるとどのような意味を持つのだろうか。前述のとおり、本学は「グローバルミッション」として、

日本の学生の海外留学の促進を掲げると同時に、「留学生の受け入れ」の拡大を通じたキャンパスのグローバル化を目指している。本稿の調査結果は、日本語ボランティアがこの両面とつながっていることを示している。日本語ボランティアの体験が今後につながる点として「留学」が挙げられており、「留学生と関わることにより自分自身が留学をする決心がついた」というようなコメントが挙げられていることから考えると、日本語ボランティアが大学の推進している海外留学の後押しをしていることがわかる。

一方で、学生たちからは、ボランティア経験が身の回りの国際交流や、日常生活において他者と積極的に関わる上で役立つという指摘もなされており、海外留学促進という狭義の「グローバル人材」育成だけではなく、留学生との交流を通じて身近なレベルでの多文化共生に貢献する人材の育成にも日本語ボランティアの経験が繋がっていることも忘れてはならないだろう（村田 2018）。

経団連の提唱する「グローバル人材」育成の提言や教育政策におけるグローバル人材育成事業においては、どうしても数値目標（英語の点数、留学者数、あるいは大学の留学生受け入れ数）に注意が行きがちになるため、本稿で分析したような「日本語ボランティア」という学生の日常の中での学習支援や交流の意義には十分な光があたってこなかった。学生が日本語ボ

ランティアの経験を通じて、海外留学、国内での多文化共生、将来のキャリア構築などについて意識を高めていることを明らかにした本稿は、本学が多文化社会に貢献する人材を育成するという視点からも大きな意味を持つものと考えられる。

最後に、学生たちの挙げた仕事、キャリアの一つとしての「日本語教育」に関して述べたい。前述したように学生たちのボランティアを通じた学びには「日本語の難しさ、日本語の面白さ」、「留学生の学習に対する驚き」、「留学生の学びから刺激を受けた」というような言語学習に関するコメントが多かった。こうしたことが日本語教育に対する興味にもつながっていると思われる。本学には現在のところ、日本語教育を学ぶ科目は全くない状況であり、本学の多文化共生を促進する人材育成の一環として、日本語教育の概要やキャリアについて知ることができるような科目が今後必要なのではないだろうか。

訪日外国人数が年々増加し、日本で働く外国人労働者数も過去最高となる中で、政府は外国人の受け入れ拡大を進める方針を発表しており、今後、生活、教育の場、職場など社会のあらゆる場面で多様な言語文化的な背景をもった人々との協働が求められている。そうした中で本稿の調査で明らかにしたような多文化の経験を持った人材を輩出していくことは、本学のグローバルミッションの一環として非常に重要なことではないかと考える。

参考文献

- 赤木浩文（2013）「日本語コースにおけるビジターセッションの学習効果と課題」『専修大学外国語教育論集』専修大学LL研究室 41：87-104.
- 加賀美常美代・小松翠（2013）「11. 大学キャンパスにおける共生」『多文化共生論—多様性理解のためのヒントとレッスン』加賀美常美代編、明石出版、265-289.
- 久保田美映・鈴木理子（2016）「日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性—留学生対象日本語授業に参加した日本人大学生Aさんの事例から—」『Obirin today：教育の現場から』桜美林大学16：73-89.
- 杉原由美（2012）「日本語プログラムが創る多言語多文化共生学習の可能性：留学生日本語授業「クラスゲスト」の応募動機に注目して」『Obirin today：教育の現場から』桜美林大学12：111-126.
- 寅丸真澄（2007）「学習者とボランティアが作り上げる授業：スピーチにおける内容の精緻化と表現形式への気づ

- きを目指して』『日本語教育方法研究会誌』日本語教育方法研究会14 (2) : 60-61.
- 永井涼子 (2012) 「日本語授業におけるビジターセッションの取組と意義：日本人学生・留学生双方の視点から」『大学教育』山口大学大学教育機構9 : 53-64.
- 中野はるみ (2006) 「異文化教育における留学生の役割」『長崎国際大学論叢』長崎国際大学6 : 55-64.
- ファン・サウクエン (2005) 「開かれた日本語教室ービジターセッションと外語大のグローバルゼーション」『外語大における多文化共生：留学生支援 の実践研究』神田外国語大学. (http://www2.kuis.ac.jp/icci/publications/pj_results/ssp/03-5_fan.pdf. 2018.09.01アクセス)
- 藤井桂子・門倉正美 (2004) 「留学生は何に困難を感じているか：2003年度前期アンケート調査から」『横浜国立大学留学生センター紀要』横浜国立大学留学生センター 11 : 113-137.
- 村岡英裕 (1992) 「実際使用場面での学習者のインターアクション能力について：「ビジター・セッション」場面の分析」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』国際交流基金2 : 115-127.
- 村田晶子編著 (2018) 『大学における多文化体験学習への挑戦：国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』ナカニシヤ出版
- 矢部まゆみ (2005) 「日本人ボランティアとの出会いと対話を基軸とした授業活動の可能性についての考察ー早稲田オレゴン夏期日本語プログラムでの実践から」『講座日本語教育』早稲田大学日本語教育研究センター 41 : 119-143.
- 横倉真弥 (2006) 「個人化作文」を通じた日本語習得についてーC.L.Lの観点からの一考察」『早稲田大学日本語教育実践研究』早稲田大学大学院日本語教育研究科5 : 97-105.
- 横須賀柳子 (2003) 「ビジターセッション活動の意義とデザイン」宮崎里司・ヘレン・マリOTT編『接触場面と日本語教育 ネウストプニーのインパクト』明治書院, 335-352.
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』異文化間教育学会5 : 81-97.